

『教理問答付き ABC』の伝統
——イギリスのチャリティー・
スクールにおける英語綴字教育

鶴見良次

イギリスのチャリティー・スクールは、それまでほとんど教育の機会を得ることのできなかつた貧しい子供たちに、キリスト教の信仰と読み書きを教え、衣服を支給することを目的とするものであった。17世紀末から、英国国教会系のキリスト教知識普及協会（The Society for Promoting Christian Knowledge. 以下、SPCKと記す）を中心に設立が進められた。運営の財源は地域の篤志家から募られる慈善基金・寄付であった。当初、カテケティカル・スクール（Catechetical School）とも呼ばれたこれらの学校は、その名の通り教理問答（Catechism）がその教育内容の中心であった¹。教理問答は、キリスト教の教理を平易な問答形式で説いたものである。SPCK草創期の議事録によれば、1698年3月に、ロンドンおよびロンドン周辺の各教会区に学校を設立し、「読み方と教理問答」を教える教師を貧しい階層から採用することなどについての提案がなされている²。さらに翌年に配布された学校建設のための寄付申込書には、それらの学校の設立意図および教育内容についての、より具体的な次のような記述が見られる。

To the End that the chief design of this school, which is for the Education of Poor Children in the Rules and Principles of the Christian Religion as professed and taught in the Church of England,

may be the better promoted; the Master shall make it his chief Business to instruct the Children in the Principles thereof, as they are laid down in the Church Catechism; which he shall first teach them to pronounce distinctly, and plainly; and then, in order to practice, shall explain it to the meanest capacity, by the help of *The Whole Duty of Man*, or some good Exposition approved of by the Minister.³

教師の主たる務めは、教理問答書に示されている教理を子供たちに教えることであるという。まず、それを「明瞭に、はっきりと述べる」ことを教え、次いで子供たちにわかりやすく説明すべしとしている。このように、これらの学校のカリキュラムの柱は教理問答に基づく宗教教育であった。しかし、この一節では、教理を理解し身につけるには、まずそれははっきりと口頭で述べる必要があるとされている。宗教教育が、おのずから言葉の理解と表現の教育を伴ったものとして位置づけられていたことがわかる。宗教教育と英語教育の結びつきは古く、16世紀中葉に登場した『教理問答付きABC』などの綴字教則本は貧しい子供たちのリテラシー教育に大きな役割を果たした。本稿では、子供用の教理問答書と教理問答を取り込んだ英語綴字教則本の発展を見ることで、「読み方と教理問答」を教えることを主眼とするチャリティー・スクールにおける宗教教育と母語教育の相補関係について考察する。

I

教理問答とは、本来は洗礼を受ける前の大人と子供にキリスト教の信仰を教えるために口頭で行われていた質問と応答のことである⁴。中世に主の祈り、信条、十戒などの系統的な教理を問答で示した入門書が登場し、

16世紀にはそれが印刷されるようになる。特に宗教改革によって宗教教育の重要性が強調されて以降は多くの教理問答書が出版された。英国国教会が1549年に出した祈祷書には「司教によって堅信礼を受ける前に誰もが学ぶべき」教理問答が含まれていた。改訂を加えたものが今日でも祈祷書のなかに入れられている。ルター、ハイデルベルクの両教理問答書と並んで、プロテスタント信仰にきわめて大きな貢献をしたのが、国教会改革を目的に開かれた1647年のウェストミンスター宗教会議で承認された教理問答書である。その短縮版は19世紀まで多くの版を重ね、現在でも英語圏のプロテスタントのものとしては最も広く用いられる。107の問答のなかで特によく知られるのは第一のそれである。問いは「人のおもな目的は、何ですか」であり、その答えは「神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」⁵というものである。

教理問答は、教会や家庭で、大人によっても子供によっても学ばれた。それは、「知識における幼子」である「無知な」大人と「年齢における幼子」である子供が、ともに初歩的なキリスト教知識を学ぶためのものであるとする考えによるものであった。しかし、教会や両親がまだ理解力の乏しい子供たちに教える際に教材とするのが典型的な使い方であった。学校用の最初期のものは、1553年にエドワード6世の勅許のもとに出された『学校教師が教えるための短い教理問答』である。セント・ポール大寺院の首席司祭アレクザンダー・ノーウェルも学校用のものを著わしており、1570年にラテン語の初版およびトマス・ノートンによる英訳版が出されて以来、17世紀末まで多くの学校で用いられた。この時期までの学校は、幅広い中間階層の子弟のために古典語・古典文学を教えることを目的とする寄付基金立グラマー・スクールであった。そのため、これらの学校用のものはラテン語読本としての性格を持っており、ノーウェルの英訳版序言に記されているように、「宗教の真理とラテン語の純正さを一石二鳥に学

ぶ」ためのものであった⁶。またこの時期には、綴字法と教理問答を併載した『教理問答付きABC』⁷をはじめとする、多くのABC（アルファベットの本）と教理問答書を兼ねた粗末な体裁の冊子が出され、それ以後の民衆のリテラシーの進展と宗教知識の伝播に大きな役割を果たした。19世紀にいたるまでベスト・セラーであり続けた『教理問答付きABC』については次節で紹介する。

チャリティー・スクールの設立が始まる17世紀末頃になると、最も基本的な教材としての教理問答書の位置づけが明確になり、生徒用のものが数多く出されるようになる。この時代になると、子供が教育されるべき対象として大人とははっきりと別個のものと考えられるようになったことをも示している。英国国教会の教会区教会やSPCKのチャリティー・スクールで最も多く用いられたのは、ジョン・ウィリアムズの『簡略教会教理問答』(1689) やジョン・ルイスの『問答法で説く教会教理問答』(1701) などであった⁸。SPCKの1719年版チャリティー・スクール用教科書カタログには、『短い問いによる教会教理問答』が含まれている。「わかりやすい言葉の説明付き」（副題の文言）で、祈祷書も合冊されている⁹。讚美歌作者として著名な会衆派の神学者で、みずからも子供用の教理問答集を編集したアイザック・ウォッツは、長老派の牧師エドワード・ボールズの『やさしく短い教理問答』(-1647) やクライスト・ホスピタル校教師トマス・ゲージの『子供のためのやさしいキリスト教の教理』(1668)、会衆派の神学者マシュー・ヘンリーの『子供の教理問答』([1700/01?]) など、非国教徒の著者による子供用のものに言及している¹⁰。

ウォッツは、チャリティー・スクールの生徒たちが聖書の内容と英語を学ぼうと、教理問答を用いることがいかに重要で効果的であるかを理念的に説いた。子供のための讚美歌集『聖なる歌』(1715)¹¹ で児童文学史にも名を残すウォッツは、牧師として早くから特に不遇な貧しい子供たちの

教育に深い関心を示していた。その『チャリティー・スクール奨励論』(1728)¹²は、SPCK主導で始められた学校建設の運動を非国教の側からも促進することを目的に書かれたパンフレットである。「親を亡くした、あるいは親が神や人についての教育を満足に子供たちに与えることのできない、貧しく不幸な」(iii頁)子供たちに宗教と読み書きの教育を施すことの必要を説いたものである。まず序言のかたちで、学校の運営に携わる者や支援者に向けて、基本的な教育意図や教師の務めについての提言がなされている。ウォッツによれば、チャリティー・スクールの教育の推進はプロテスタントのキリスト教精神を進展させ、子供たちを国家や政府に資する人材に育て上げることで、公益を促進するものでなければならぬと言う。教師はそうした崇高な使命を担っており、それにふさわしい人格者が選ばれなければならない。また学校の具体的な教育目標については、次のように書かれている。

Be not contented merely to have them read the *Bible*, and be taught the *Catechism* at proper Seasons, but let the Truths and Duties of it be explained to them in a familiar and easy Way, by taking the Answers to Pieces, and instructing the Children till they understand the Sense of them. (p. vi)¹³

ここで注目すべきは、「聖書を読ませ、教理問答を年齢に即して教えるだけで満足してはならない」という冒頭の一節である。ウォッツの考える児童教育において重要なのは、単に聖書を読ませ、教理問答を教えるだけでなく、生徒たちがそれらの意味を理解できるまで、わかりやすく噛み砕いて教えることであった。この忠告からわかることは、これらの学校では宗教教育と英語教育が一体となっていたことである。生徒に教理をしっか

り会得させることの必要を強調するこの一節には、その一方で、教材の内容の理解を深めるためには読み方についての指導の工夫が必要であるという考えも見ることができる。

『チャリティー・スクール奨励論』を発表した翌々年、ウォッツは教理問答の指導書『教理問答の教育法と構成法』を著わしている。まだ理解力の乏しい幼い子供たちに宗教知識を学ばせるうえで、わかりやすく作られた教理問答がいかにも有用で効果的であるかを両親や家庭教師に説得しようとするものである。

第5節でウォッツは、発達段階にふさわしい宗教教育があり、幼い子供たちには『ウェストミンスター小教理問答』よりもやさしいものから学ばせるべきであると言う。その際ウォッツは「宗教のABC」である入門的な宗教教育を読書教育と対比して、「子供が読み方を覚える場合には、私たちはまず文字を教えることから始め、次いで音節や単語を綴ることを教えるのではないか」と問いかけている。「そのうえで、短いやさしい文が与えられ、その後より長く難しいものが与えられる。幼い子供に、学校に上がった当初から、いきなり彫琢された難しい文章を読ませたりはしないものだ」と言う¹⁴。他の教科でも同様であり、いわんや「宗教についての崇高で重要な事柄を子供たちに教えるに際しても同じやり方すべきではないか」と。ここでは、言葉の知識の習得と宗教の知識は、段階的な学習の効果という文脈において同質のものと捉えられている。注意すべきはその両者が単なる比喩として対比されているだけではなく、宗教の知識が言葉の知識の増加に伴ってより高度で複雑なものになってゆくことが示唆されていることである。ウォッツにとっての宗教教育は、英語教育とともに進められるべきものであった。

第8節では、牧師や教師に向けての「子供用教理問答の構成法」のヒントが15項目にわたって綴られている。言葉の教育との関わりでは、発達

段階に即したものを作ること、ぜひ必要な内容だけを、できるだけやさしい言葉で、子供たちに親しみのある表現を用いて示すこと、また大きな子供のためのもので、難しい言葉や表現を用いる場合には、その言葉が見られる問答の末尾に注釈を付けることなどが推奨されている。いわゆる英語の初等読本と同じ発想で教理問答書が編まれたことがわかる。ウォッツはその主張どおりに、発達段階に合わせた子供の教理問答書をみずから書いている。すなわち、『第1教理問答——3、4歳児から学ぶ』（全24問答）、『第2教理問答——7、8歳児から学ぶ』（全78問答）、『教理問答——12-14歳向き』（全107問答）である。

『第1教理問答』の序論には、「子供に教理問答の意味を理解させるには、親や教師に十分な指導の技術が必要である」とされ、勉強の進め方についての具体的な指示がある。

Surely a child of four or five years old may easily learn one answer in the First Catechism every week; and since there are but four and twenty questions in it, he may finish it in five or six months time; and he may grow very perfect both in the word and meaning by repeating it constantly once or twice every week till he be seven years old. If the young child can read before he has learned this catechism by heart, it may be useful for him to read it all over by way of lesson at the reading school every week while he is learning it, that he may take in the meaning of it the better, and that the answer may become familiar and easy to him.¹⁵

ここからも、教理問答の学習が、読み方の学習と連動したものであり、教理問答書が学校の英語教科書として用いられたことがわかる。しかも、各

年齢における学習方法の指示が見られ、段階を追って、継続してキリスト教知識を身につけてゆくことは、同じように言葉についてのくわしい知識を身につけてゆくことになると考えられている。教理問答書が内容重視の英語教材であったことがわかる。

II

SPCKの『短い問いによる教会教理問答』やウォッツの子供用教理問答書の第一の目的は、言うまでもなく信仰に関する基本的な知識を教えることであった。ウォッツがその著作で論じたのも、あくまでも教理問答書の教育の重要性とその方法であった。そしてその方法のなかに、子供たちに年齢段階に即して正しい母語の表現を学ばせる教育法が含まれていた。すなわち、ウォッツ等においては、教理問答書をそのまま用いることで読み方の練習を行うことが目指されていたのである。一方、教理問答書をそのまま読本とするのではなく、教理問答を教材としてアルファベットや綴字の教則本のなかに挿入するということが古くから行われていた。

そもそも、中世から18世紀にいたるまで、文字の教育は宗教教育と密接なものであった。一般にABCと呼ばれるアルファベットを学ぶための本で、現存する最も古いものは1530年代末にロンドンのトマス・ベティトが出版したものであるとされる。髭文字の小文字のアルファベット、母音とシラブルの表などの末尾に、祈祷の言葉、食前食後の感謝の言葉などが付けられていた¹⁶。『キリスト教徒のABC』の著者イアン・グリーンによれば、ABCに教理問答を合体させるという発想も、それとほぼ同じ時期、すなわち1540年代半ばには見られたものであるという。なかでも1551年に出された『教理問答付きABC』は当初から大ベスト・セラーであり、それ以後19世紀にいたるまで、おびただしい版が出され

た教会公認のプライマー（教理入門書）である。その内容は、髭文字、ローマン体、イタリック体のそれぞれ大文字と小文字のアルファベット、シラブル表、300までの数字、祈祷書教理問答、そして食前食後の感謝の言葉である。1570年代に祈祷書教理問答にいくつかの節の追加などがなされたようであるが、基本的な形式は18世紀に出されたものにいたるまで変わっていない¹⁷。

『教理問答付きABC』の出版部数は驚異的なものであった。1582年には、同書の著作権を所有していたジョン・デイの申し立てによれば、大手版元の特権に憤る同業者の1人ロジャー・ウォードが徒弟に1万部の海賊版を刷らせたという。それは当時の一般的な説教、論説などのおよそ6刷から8刷分に相当する部数である。3年後に事業を引き継いだデイの息子も、複数の出版者が数万部の海賊版を出したことを告訴している。1660年に始まる王政復古期前半の10数年の間にも、印刷出版業組合ステイショナーズ・カンパニーに毎年数回、5千部から1万部が納品されたという。さらに、18世紀から19世紀にかけてのジョージ2世、3世治下においても、毎年2万部程度が刷られていた¹⁸。『教理問答付きABC』に限らず、教理問答を教材にアルファベットや綴字を学ばせる小型の教則本が16世紀以降数多く出され、流布した。教理問答を併載したABCが、イギリス近代の民衆のリテラシーとキリスト教知識の普及に大きな役割を果たしたことは間違いない。

一方、チャリティー・スクールにおける教理問答と英語教育との関わりについて考える際に忘れてはならないのは、それまでも英語教則本において文法規則などがしばしば問答形式で解説されていたことである。この形式は、古くからヨーロッパで入門的な綴字教則本や文法書に一般的に用いられていたものである。ラテン語を問答形式で教える伝統は、ルネッサンス期フランスの教育者マチュラン・コルデイエの『教育論』にさかのぼる

ものとされる。同書は1563年に刊行され、その後多くの版や模倣書が出され、さまざまな言語に翻訳された。ジョン・プリンズリーの英訳が1614年に出されている。プリンズリーはグラマー・スクールの生徒向けにラテン語文法を応用した英文法教則本『ルードゥス・リテラリウス』(1612)の著者として知られ、同書も問答形式で書かれている¹⁹。プリンズリーはそれ以前にも、幼い子供向けに口頭表現の練習のための教科書『子供の会話』(発行年不祥。1617年以前)²⁰を出している。さまざまな日常的な場面における大人と子供の、また子供どうしの会話を通して口語表現を学ぶことを目的としたものである。ハートフォード州のレミンスター校などで教師を務めたA・レインの『読み方書き方の鍵』(1700)²¹は、初歩的な内容から、ある程度複雑な内容にいたるすべての語法・文法が問答形式で説明されている。問い「派生動詞はどのように作られるか?」、答え「派生動詞は一般に名詞、形容詞から作られ、それらに動詞語尾を加えることで作られる。「乗船する」の意味の*ship, I ship, thou shippest, he shippeth*のように。」(71頁)また、ウォッツは、教理問答集の編集に先立って1721年に『英語の読み方書き方』²²を刊行した。これは、当初家庭教師として教えていた子供たちのために書かれ、後にチャリティー・スクールの生徒のために出版されたものである。各綴りの音などについての初歩的な内容の部分が問答形式で説かれている。そしてこのことについて「一般的方法に従って、問答形式で書いた」(38頁)と付記している。第1問は、「読むとはどういうことか」であり、答えは「書かれた言葉を正しい音で表すこと」である。ウォッツは、この形式で読み書きの基礎知識を身につけた後に読む教材として、年齢別の教理問答集を編集したとも言える。また、ヘンリー・ディクソンの『イングリッシュ・インストラクター』(1728)の第2部が問答形式の綴字法提要であることは後にくわしく紹介する。

教理問答書の形式が、宗教的内容を伴わない語学の教育法にどのように影響を与えたかについては、ここでは問わない。ただし、チャリティー・スクールの生徒をはじめとする、それまで文字や綴字法に触れたことのない子供たちに母語の教育を行う際に、すでに子供の教育につきものとなっていた教理問答書の形式とその指導法が応用されたこと自体は事実であったように思われる。どのような内容の知識であっても、問答形式で解説することによって、子供が最もよく理解するとの考え方がそこにはある。古典語教育や宗教教育で問答形式に親しんでいた英語教師にとって、この形式を用いることに躊躇はなかったのである²³。

フレンド派の創設者ジョージ・フォックスと、同じくクエーカーのエリス・フックスの共著『英語の綴字と読み書き』(1673)²⁴はこの時期に最も多くの読者を得た英語教則本の一つである(図1)。1769年までに少なくとも12回増刷され、またアメリカ各地でも出版された。3年前に『子供のためのプライマーと教理問答』の表題で出されていたものの増補版である。誤記の訂正がなされたほか、同音異義語の一覧などが追加され、はるかに完成されたものとなっている。もとの表題に見られるように、英語の教科書に教材として教理問答が収められたものである。161ページ、26章からなり、アルファベット、シラブル、綴り、聖書中の人名や度量衡・貨幣、悪魔や人やキリストの呼び方などの章の後、第13章が33ページにわたる教理問答である。その後は、箴言、綴字と発音、句読法、難語辞典、同音異義語集、聖書中の固有名詞、数、度量衡、貨幣などの章が並ぶ。章立てからもわかるように、この英語教則本は、子供が聖書を読み、理解するための手引書として作られたものである。

教理問答は、この教科書の真ん中に置かれ、そこまでに学んだ基本的知識を応用して、読み方を練習するための教材となっている。生徒はさらにその練習を経て、綴字と発音の関係の単元、同音異義語の単元、聖書中の

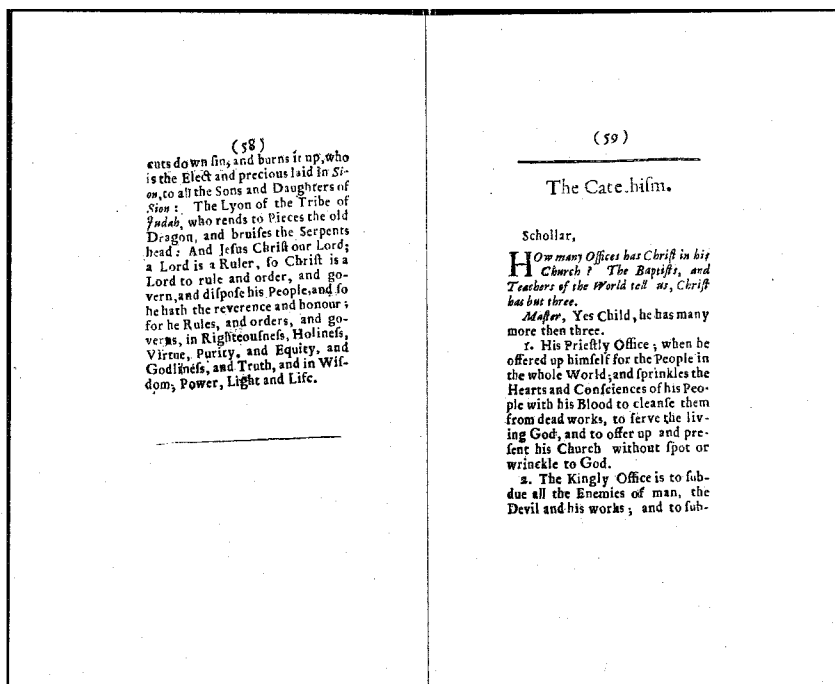


図1 ジョージ・フォックス、エリス・フォックス『英語の綴字と読み書き』（1637年）58-59頁

難語の理解の単元へと進む。教理問答はこの教科書の言わば要に置かれて
 いるのである。その第1問は、生徒の次の問いから始まる。「キリスト様
 の教会でのお仕事はいくつありますか？ バプテイスト派や世界の教師派
 の人たちは、3つだけであると言います。」^{かなめ}25 答えは「いえ、キリスト様
 にはもっと多くのお仕事があります」であり、祭司としての職務、王と
 しての職務、預言者としての職務、主教としての職務、羊飼いととしての職
 務など、10の職務を箇条書きで挙げ、それぞれに数行の解説を付けてい
 る。(59-63頁)

教理問答を教材として綴字などを学ばせるこの教授法は、チャリティー・スクールの母語教育においてもきわめて一般的なものとなった。ホールバンのセント・オルバンズ・チャリティー・スクール教師ヘンリー・ディクソンが著わした『イングリッシュ・インストラクター』²⁶は、くわしい綴字教則本のなかに、聖書の内容を盛り込んだ詩や散文などとともに教理問答を収録したものの代表例である(図2)。同書は1728年の刊行後、多くの学校で用いられ、1823年までの百年ほどの間に少なくとも69回増刷されている。ディクソンは、序言で、子供たちの理解力にあった英語教科書がなかなか見当たらず、多くのものが難し過ぎたり、やさし過ぎたりすると不満を述べる。自分の書では、いきなり母音と子音の区別や意味のわからない語のシラブルを教えるようなことをせず、子供が意味を理解しながら英語の知識を身につけてゆかれるよう工夫したと言う。また、教師は、子供が「なまったり、鼻にかかったような発音をしたり、不まじめな話し方をしたり」しないようにさせ、「どもったり、聞きづらい発音をしたりせずに、文字や言葉を、正確に、聞き取りやすい音で、はっきりと発音するように指導せよ」という。英語教材としての教理問答が意味を持つのは、その内容を理解し、口頭でしっかり述べる能力の養成が重要だからである。第1部で文字や語の基礎知識をつけた上級生のための第2部は、綴字法の規則を教理問答に倣った問答形式で説くことから始まり、宗教教育に必要な語についての問答形式による解説、そして聖書教育の方法論へと続く。

綴字法の問答形式の部分には、たとえば次のような問答が見られる。「どの語の、どの位置に置かれると *y* が母音の *i* の音になるのか?」「*my*、*thy*、*why*、あるいは、*Cypress*、*Egypt*などの語においてです。」(95頁)、「三重母音を形成する母音はどれか?」「*Beauty*のなかの *eau*と、*lieu*、*adieu*のなかの *ieu*です。これらはフランス語から派生した語にのみ見られ

T H E
English Instructor;
SARAH OR, THE *Judson*
ART of SPELLING

I M P R O V E D .

Being a more Plain, Easy, and Regular METHOD of
Teaching Young Children, than any Extant.

In Two P A R T S .

The FIRST; Containing MONOSYLLABLES, expressing
the most natural and easy Things to the Apprehensions of Chil-
dren; with common Words, and Scripture proper NAMES, alpha-
betically rang'd, with their proper Accent, and divided according
to the RULES of ORTHOGRAPHY.

The SECOND, Being an INSTRUCTION more particu-
larly design'd for Children of an higher Class; such as have not
only made some Advances in their Reading, but are capable of
understanding, and applying the Rules there given; and contains
Observations on the Sound of Letters, with the Use of True Point-
ing, and other Things necessary for an *English* Scholar.

To which is added,

A METHOD of INSTRUCTION out of the Sacred Writings, and the
Catechism of our Church.

The Whole being intermix'd with Variety of EXERCISES, in Prose
and Verse; adapted to the Capacities of Children; and design'd
as well to instruct them in the Duties of Religion, as to render
the Initiatory Part of Education, easy, profitable, and delightful.

Drawn up for the Use of SCHOOLS.

By HENRY DIXON.

L O N D O N :

Printed for J. HAZARD at the Bible near Stationers
Hall, and I. LEAKE Bookseller and 1728.

図2 ヘンリー・ディクソン『イングリッシュ・インストラクター』(1728年)扉

ます。」(96頁)

ディクソンの宗教教育の方法は、生徒自身に聖書のいくつかの章を繰り返し読ませ、内容を熟知させたいうで、重要な件を示す、その後、教理問答を行って知識を確認するというものである(116頁)。末尾に教理問答が載せられている。序言には、第2部を学んだなら、その知識をもとに、夜間の自習として、作文練習をし、宗教的、道徳的な良書の書写を行い、綴字の規則とキリスト教の知識を合わせて学ぶことが推奨されている。「これが母語教育の基礎を身につけさせるだけでなく、われわれにとってはるかに大きな関心事である、子供たちに神聖なる宗教の知識と儀式を教えることに大変に役立つのである。」教理問答は巻末に近い117ページからの6ページである。全体としては簡潔なものだが、一問一答のセンテンスは比較的長く、やさしくはない。第1問で名前を問われ、名、洗礼名を答えた後の第2問は、「だれがその名をつけたのか？」であり、答えは「洗礼時の教父、教母です。私は洗礼によって、神の子であり天国の継承者たるキリスト様のものとなりました」である(117頁)。「聖サクラメントにはいくつの部分があるか？」との問いの答えは「2つです。外面の目に見えるしるしと、内面の霊的な恩恵です」である(121頁)。恩恵(Grace)という言葉は、すでに聖書理解に役立つ語彙についての問答のページで、「神の惜しみない贈り物であり、恵み」(112頁)であることが学ばれている。綴字の知識を身につけながら、語彙、表現、そして思想をそれぞれ段階を追って学ぶことによって、難しい内容が理解できるように教科書全体の構成が工夫されている。

『インゲシッシュ・インストラクター』の構成の特徴は、綴字法の基礎を問答形式で十分に学んだうで、教理問答などによって、内容理解を伴ったものとして読み方の練習を行うという段階の踏み方である。チャリティー・スクールのリテラシー教育の重点はあくまでも読み方の指導であ

り、書き方の習得は多くの生徒には求められなかった。ウォッツは、『チャリティー・スクール奨励論』で、ごくまれにいるきわめて優秀で勤勉な生徒をのぞけば、「貧しい子供が上位の職業につくほどに書き方や計算の能力を上達させるようには教育していないし、またするべきでもない」と述べている(37頁)。聖書や祈祷書を読めるようにすることが目的であり、その意味で、英語教育は宗教教育に付随した位置にあるとも言える。それに対し、ディクソンの書は、あくまでも綴字教則本であり、主体は英語教育にあり、その素材として教理問答や宗教的な内容の詩や散文が用いられている。もちろん、すでに見たように、ディクソンは「子供たちに神聖なる宗教の知識と儀式を教える」ことを重視している。しかし、同書の構成と内容には、チャリティー・スクールの英語教育が、宗教教育に付随したものから、それ自体で独立したものとなってゆく1つの局面が認められるのである。ディクソンが作文や書写の自習を生徒に勧め、書き方の教育にも目を配っている点も、ウォッツとは異なる。あくまでも聖書を読むための手引書としての性格の強いフォックス等の『英語の綴字と読み書き』と比べれば、ディクソンの書に英語の教科書としての単元の発展を意識した教授法が含まれていることは明らかであり、教理問答は、むしろその練習用のテキストとなっている。『教理問答付きABC』の教授法を受け継ぎつつ、それをよりくわしい内容の綴字教則本に発展させたものと言うことができる。

III

『教理問答付きABC』の伝統に見られるように、16世紀半ば以降、綴字法の教育と教理問答のそれとは明らかに相補的な関係にあった。17世紀後半から18世紀半ばにいたる時期の教理問答の教育方法にも、宗教教育

主体のものと英語教育主体のものが共存していた。しかし、いずれにせよ、チャリティー・スクールにおける最も基本的な教材が教理問答であることに変わりはなかった。チャリティー・スクールの英語教育について考えるうえで重要なのは、18世紀にいたっても、それがあくまでも内容を重視したものであったことである。まず生徒に求められたのは教理問答の理解と暗唱であった。そのために基礎的な綴字法と読み方の知識が必要とされたのである。さらには聖書の内容に関するさまざまな語彙や表現を学び、聖書そのものを理解するだけの読解力を養うことが求められた。教理問答を暗唱し、聖書の知識を習得することには、「神の言葉」たる英語の読み方を学び、理解し、それを正確に述べるという目的があった。ディクソンの書に見られる、綴字を学び始めた生徒のための1シラブルの言葉を用いた讚美歌（「聖書を読むことの讚美歌」）には、英語の読み方を学ぶこととプロテスタントの信仰とのつながりを理解させるための次のような詩行が含まれている。

NOW I have learnt thy Word to read,
Teach me, O Lord, to pray;
That from thy Laws, like the lost Sheep,
I may not err or stray.
Then join my Heart to such as chuse,
In thy pure Paths to tread;
And by the Word, and Grace, and Hand,
To all that's good are led. (p. 15)

この時期に宗教的知識と綴字などの英語の知識がしばしば同じ問答形式の指導法のもとに教育されたのは、単に教育技術上の効果が期待されたか

らだけではない。内容の理解と暗唱という基本的な英語指導法は、英語を学ぶことは、すなわち聖書に示された「神の言葉」を学び、身につけることであるとする考え方に基づいたものであった。たとえば、ロンドンのセント・ボトルフ教会主任牧師ホワイト・ケネットはチャリティー・スクール向けに1707年に出した初等英語教則本『クリスチャンの生徒』²⁷のなかで、「シラブルを綴り、すべてのセンテンスを読み、それによって人間の意味と、神様のご意思を知ることができるということは、諸君にとって大変な利益をもたらすものである」（8頁）と書いている。また生徒等を前にした説教では、チャリティー・スクールが「宗教改革の支えとなり、守りとなるという目的」を担ったものであるとも述べている²⁸。ウォッツは『チャリティー・スクール奨励論』のなかで、読み方の教育の必要についてプロテスタントの神学者として興味深い見解を示している。聖書をラテン語でしか読めないカソリックの国々においては、貧しい階層の者たちはみずから聖書の知識に近づくことができないが、イギリスではそうではないと言う。そして、「聖書が母語に翻訳されているにもかかわらず、読み方を学んでいないために、それが役に立たないような者たちが同胞のなかにいるとすれば、嘆かわしく、また恥ずべきことではないか」と問いかける（19頁）。英語によってキリスト教知識を広めることの重要性が認識されているのである。それは、反カソリック意識に裏打ちされた母語尊重の姿勢を示すものであった。このように英語によるキリスト教知識の普及を寿いだウォッツのことも考え合わせれば、『教理問答付きABC』の伝統は、貧しい子供たちの教育に携わったプロテスタントの著者や教師たちの信念によって学校の教科書という新しい媒体に受け継がれ、イギリスにおける成立期の英語教育法の基本となったと言える。

アルファベット、シラブルのほかに聖書の語彙集、聖書の物語、教理問答、数表などを収めた綴字教則本は、19世紀にいたるまでチャリテ

ー・スクールや日曜学校で盛んに用いられた。チャリティー・スクールや日曜学校の設立などの慈善教育運動に積極的に加わった福音主義作家で教育批評家のセアラ・トリマーは、『チャリティー・スクール教育省察』(1792)で教理問答の指導法に触れ、「週に1、2度は、教理問答の指導がなされる。教室内に生徒を立たせ、順番に教会教理問答に答えさせ、それについての説明が行われる。」(30頁)と記している。トリマーは1790年代にSPCKから『チャリティー・スクール綴字教則本』第1部、第2部を出している。いずれも、多くのチャリティー・スクールや日曜学校で用いられた。第1部は短音節の言葉だけを学ぶものだが、第2部はフォックスとブックスやディクソンのものとはほぼ同じ構成になっている²⁹。アルファベット、シラブル、数表、教理問答、祈祷という『教理問答付きABC』に見られた構成が、18世紀を通して綴字教則本の標準となっていたのである。

IV

カテケティカル・スクールとも呼ばれたチャリティー・スクールの教育において、教理問答の指導は、まさしくカリキュラムの中心であった。イギリス近代のキリスト教徒にとって、母語たる英語を学ぶことは、教理問答を学ぶことにほかならなかった。英語教育と宗教教育を結びつけ、その相補的な関係を成り立たせるちようつがい蝶番となっていたのは、英語を学ぶことが、すなわち「神の言葉」を学ぶことであるとする母語教育の思想であった。18世紀におけるリテラシーの驚異的な進展は、民衆向けの宗教的出版物を媒体とした、教会での、各種学校での、また家庭での読み方の教育の普及によるところが大であると言える。特に、教理問答書は、それ自体が宗教教育と英語教育の共通の教材として用いられた。読み書きに

なじみのない子供たちが聖書を読むためには、ぜひとも基礎的な英語教育が必要であった。それが、リテラシーを身につけていない貧しい子供たちの学校が教理問答の読み方の指導を行うカテケティカル・スクールとして建設されていったことの動機であった。またその一方で、書き言葉に触れたことのないこの時代の子供のための初歩的な英語教育にとっても、教理問答を読みながら綴字を学ぶ『教理問答付きABC』の教育法は有効であった。16世紀半ば以降、長い期間にわたって各宗派の教理によるさまざまな版の子供用の教理問答書が出版された。それは、『教理問答付きABC』のようにABCを兼ねたものや、教理問答の形式を応用したよりくわしい綴字教則本とともに、チャリティー・スクールにおける母語教育の基本的な教材となったのである。

注

- 1 イギリスのカテケティカル・スクールに先立つドイツ16世紀のカテキズム・シューレ（教理問答書学校）の成立事情は、宗教改革期の教育一般および本稿の主題である18世紀イギリスの母語教育史について多くの示唆を与える。林正登「宗教改革と庶民教育——教義問答書学校の成立を中心に」（『福岡教育大学紀要』19号、4分冊、教職科編、1970年2月、27-41頁）を見よ。
- 2 引用を含め、W. K. Lowther Clarke, *A History of the S.P.C.K* (London, 1959), p. 11を参照。
- 3 *A Form of a Subscription for a Charity School* (London, 1699). *The English at School: An Anthology*, ed. by G. F. Lamb (London, 1950), pp. 57-58所収。
- 4 教理問答書一般の略史は、Ian Green, *The Christian's ABC: Catechisms and Catechizing in England c. 1530-1740* (Oxford, 1996)のほか、主に以下の辞典類を参照。Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford, 1984)（ハンフリー・カーペンター、マリ・プリチャード『オックスフォード世界児童文学百科』神宮輝夫監訳、原書房、1999年）、E. A. Livingstone, *The Concise Oxford Dictionary of the*

Christian Church (Oxford, 2000) および *International Companion Encyclopedia of Children's Literature*, ed. by Peter Hunt (London, 1996) の II, 21, 'Religious Writing for Children' の項目。また、キリスト教関係の用語(訳語)については J・R・H・ムアマン『イギリス教会史』八代崇、中村茂、佐藤哲典訳、聖公会出版、1991年)、大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』(岩波書店、2002年)などを参照。なお、教理問答集と英語教則本の書誌は、Greenの書と Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987) のビブリオグラフィ、および BL カタログによる。

- 5 日本基督改革派教会大会出版委員会編『ウェストミンスター信仰基準』(新教出版社、1994年)所収の「ウェストミンスター小教理問答」、3頁。
- 6 *A Short Catechisme ... for All Scholemaisters to Teache* (London, 1553); [Alexander Nowell], *A Catechisme; or, First Instruction of Christian Religion* (London, 1570). ノーウェルの書については、英訳版序言の引用を含め、David Siegenthaler, 'Religious Education for Citizenship: Primer and Catechism', in *The Godly Kingdom of Tudor England: Great Books of the English Reformation*, ed. by John E. Booty (Wilton, 1981), 219-49 (pp. 241-42) を参照。
- 7 *The/An ABC with the/a Catechisme, That Is to Say an Instruction to Be [Taught and] Learned by Every Child/ Person, before He Be Brought to Be Confirmed by the Bishop* (London, 1551).
- 8 John Williams, *A Brief Exposition of the Church-Catechism* (London, 1689); John Lewis, *The Church Catechism Explain'd by Way of Question and Answer* (London, 1701). M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (London, 1964), pp. 373-75 所掲の SPCK の推薦図書リストを参照。
- 9 *The Church Catechism Broke into Short Questions* (London, 1709). *Reading in the History of Education*, ed. By Ellwood P. Cubberley (Boston, 1920), pp. 381-82 を参照。
- 10 [Edward Bowles], *A Plain and Short Catechism* (London, -1647); Thomas Gouge, *The Principles of Christian Religion Explained to the Capacity of the Meanest* (London, 1668); Matthew Henry, *A Catechism for Children* (London,

- [1700/01?]). Isaac Watts, 'A Discourse on the Way of Instruction by Catechisms, and of the Best Method of Composing Them', in *The Works of the Reverend and Learned Isaac Watts, D. D.*, compiled by the Rev. George Burder, 6 vols (London, 1810), III, 210–11.
- 11 『聖なる歌』については川口喬一編『文学の文化研究』（研究社出版、1995年）所収の拙論「教訓主義の衰退——アイザック・ウォッツの『聖なる歌』とそのトラクト」を見よ。
 - 12 Watts, *An Essay towards the Encouragement of Charity Schools* (London, 1728).
 - 13 原文はイタリック体（強調がローマン体）である。
 - 14 Watts, *Works*, III, 208–09. ウォッツの発達段階に即した教理問答の教授法については、Green, *Christian's ABC*, pp. 271–74 をも見よ。
 - 15 Watts, *Works*, III, 229.
 - 16 Carpenter and Prichard, p. 2（邦訳、41頁）を参照。
 - 17 Green, *Christian's ABC*, pp. 174–75 を参照。16世紀のプライマーやABC中の教理問答については、Charles C. Butterworth, *The English Primers (1529–1545): Their Publication and Connection with the English Bible and the Reformation in England* (Philadelphia, 1953), pp. 32, 35, 65, 76, 213, 253–54 を見よ。
 - 18 Green, *Christian's ABC*, pp. 175–76 を参照。
 - 19 『ルードゥス・リテラリウス』については、拙論「ラテン語文法訳読と母語教育——ジョン・プリンズリー『ルードゥス・リテラリウス』と17世紀イギリスの英語教育」（『成城文藝』200号、2007年9月、(65)–(79)頁）を見よ。
 - 20 John Brinsley, *Pueriles Confabulatiunculæ; or, Childrens Dialogues* (London, 1617; repr. Menston, 1971). なお、この段落のコルディエと問答形式の教育法についての記述も同復刻版のnoteを参照。
 - 21 A. Lane, *A Key to the Art of Letters; or, English a Learned Language, Full of Art, Elegancy and Variety* (London, 1700; repr. Menston, 1969).
 - 22 Watts, *The Art of Reading and Writing English* (London, 1721; repr. Menston, 1972).
 - 23 近代の宗教／読み方教育における問答形式の利用についてはGreen, *Print and Protestantism in Early Modern England* (Oxford, 2000), pp. 151–55 をも参照。

- 24 George Fox and Ellis Hookes, *Instructions for Right Spelling, and Plain Directions for Reading and Writing True English* ([n.p.], 1673; repr. Menston, 1971). 書誌的解説は同復刻版のnoteを参照。
- 25 引用中の「世界の教師派」は‘Teachers of the World’（不詳）の訳。
- 26 Henry Dixon, *The English Instructor; or, The Art of Spelling Improved* (London, 1728; repr. Menston, 1967). 書誌的解説は同復刻版のnoteを参照。
- 27 White Kennet, *The Christian Scholar: In Rules and Directions for Children and Youth, Sent to English Schools* (London, 1707). 引用は20th edn (London, 1811)より。なお、同書については、拙論「初期チャリティー・スクールのリテラリー・カリキュラム——18世紀イギリスにおける‘English’という教科の成立」(成城大学短期大学部『紀要』34号、2002年3月、1-14頁)を見よ。
- 28 Kennet, *A True Report of the Charity Schools* (London, 1706), pp. 36-37. Dorothy Gardiner, *English Girlhood at School: A Study of Women's Education through Twelve Centuries* (Oxford, 1929), p. 302に引用されている。
- 29 [Sarah] Trimmer, *Reflections upon the Education of Children in Charity Schools* (1792, London), p. 30; *The Charity School Spelling Book, Part 1* (London, -1798), *Part 2* (London, -1794). トリマーの教理問答の指導法については、岩下 誠「モニトリアル・システムの条件と限界——サラ・トリマーの教育思想と教育実践を通じて」(日本教育学会『教育学研究』73巻、1号、27-38頁)の特に2節を見よ。